



## 企画にあたって

永嶋孝一

(日本大学医学部内科学系循環器内科学准教授)

今、上室（心房）性不整脈が激アツである！ それは心房マッピングの解像度が格段に進化しているからだ。

日進月歩で進化する3D マッピング機器や、局所電位を高密度に記録できるカテーテルは、まるで写実主義（リアリズム）の時代に突如登場した写真のように、一気にその解像度を上げ、リアルな心房興奮を7色で詳細に描くことに成功した。

それでもなお、3D マッピングという名の写真には写らない「未知」がある。房室結節の slow pathway やベラパミル感受性 AT の緩徐伝導部位、心外膜伝導や心房細動のローターなど、挙げればきりが無い。

しかしこの10年で、EPS（心臓電気生理学）もまた進歩した。二次元の写真では表現できない多次元を見事にとらえたピカソのキュビズムや、写真には写らない内面までもを描き切ったカンディンスキーの抽象画のように、EPS は「マッピングでは描出できない未知」を可視化し、上室不整脈の機序の詳細な解明に成功した。特に近年の進歩には、日本発のエビデンスが大きく寄与していることも感慨深い。

さらに現代は、パルスフィールドアブレーションという、従来の温度変化によるアブレーションとは概念の違う新しい治療法が開発された。デュシャンに代表される概念（コンセプチュアル）アートのように進化したこの治療法で、アブレーションの有効性と安全性がさらに改善することが期待される。

この最新の3D マッピング技術と最高の EPS の知識のかけ算で、頻拍の機序や回路を完全解明し、最良のアブレーションを行うのが僕たちの世代である！ 発作性心房細動は再発しないことが当たり前になり、房室結節-His 束近傍の上室頻拍は安全で最小限のアブレーション治療がスタンダードとなった。持続性心房細動だって治療できる時代の足音も、すぐそこに聞こえてきている。

この人類がひとつひとつ積み上げてきた、最新で最高な心房マッピング / アブレーションの英知を、目を輝かせて不整脈王を目指す、すべての人に余すことなく紹介したい。